

八幡町史資料 第四号

西屋敷貝塚

愛知県知多郡知多町

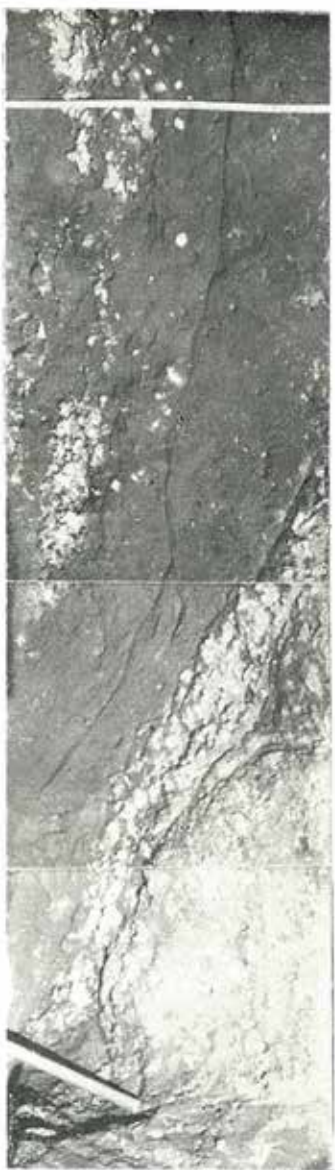
西屋敷貝塚 正誤表

頁段行 正 誤

24 24 23 22 22 21 15 15 15 12 9
 下 上 上 下 下 上 上 上 下 下
 20 9 15 18 12 10 2 20 19 18 7 3

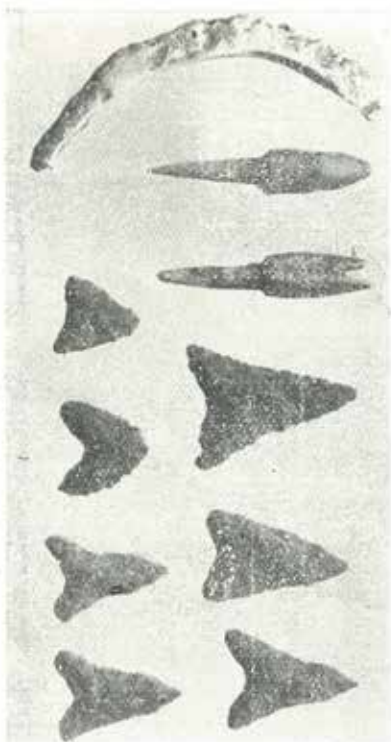
土器型式
 くの字状
 (神図8)
 遺跡のある砂堆
 植物が密生
 当事者
 本川谷貝塚
 ことがある
 精製土器に
 粗製土器の
 山内清男氏の
 あがなわれた

土器形式
 くの字状
 (神図8)
 遺跡のある砂堆
 植物がの密生
 当事者
 本川谷塚
 ことがある
 精製土器と
 粗製の
 清男の
 あがなわれた

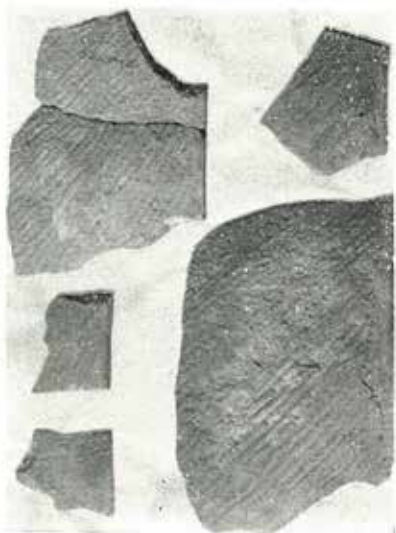


2. 表土採集の
弾石式土器

1. 第一トレンチ東壁の貝層

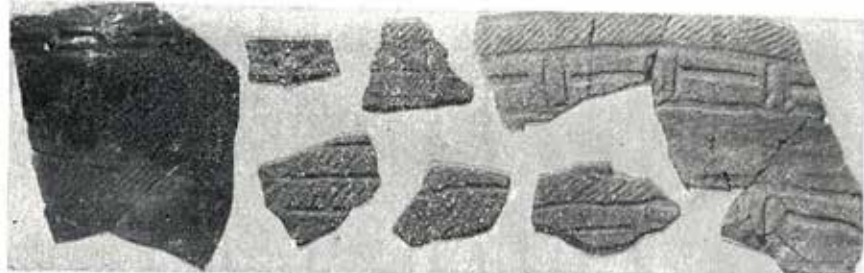


3. 貝製品・骨角器・石器



4. 上層出土の土器

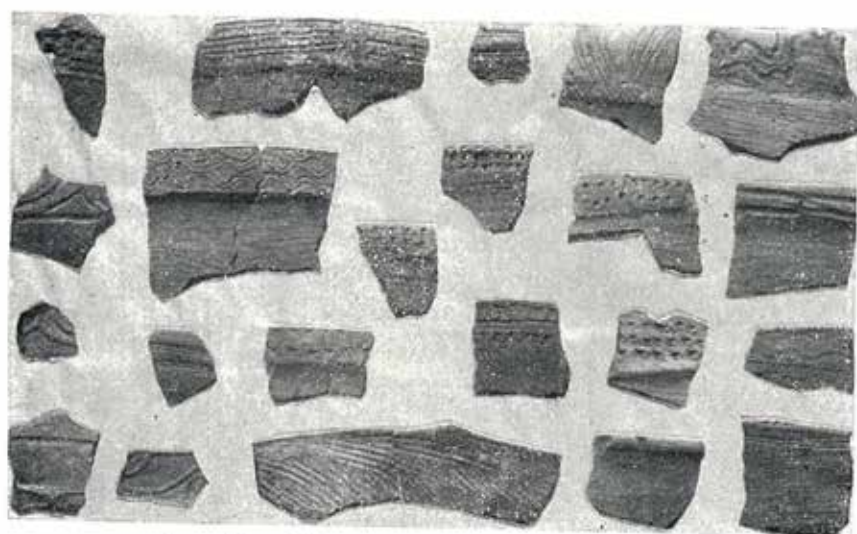
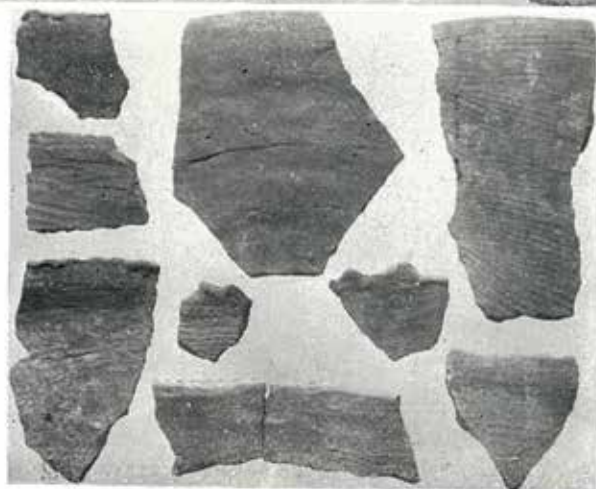
図版第二



1. 中層出土の土器



土器底部



2. 下層出土の土器

序 文

知多半島の西海岸に位置している八幡の地域には、せまい沖積平地にもかかわらず海岸線にそって幾条もの砂堆列が発達しております。そしてその砂堆の上には日本における農耕文化の発祥期のところからいくつかの集落がいと生まれ、さきに八幡町史編纂会では「八幡のむらのおいたち」（八幡町史資料第二集）一編を中間報告の形で刊行し、野崎・獅子懸その他の遺跡を紹介したのであります。ところがその後にはり砂堆上の低地集落はただ農耕文化期にとどまらず、その以前の狩猟生活の時代よりの伝統がうけつがれていることがわかってきました。

隣接町村との合併により知多町が誕生してから八幡町史編纂の事業は八幡公民館でうけついたのであります。八幡公民館ではすでに年余にわたり、新しく知られてきた西屋敷貝塚の学術調査に当たってまいりました。その間、事業をすすめるに当り多くの諸賢から各種の御指導御協力をいただきましたことに対し深く感謝いたしております。さらに直接調査を担当していただいた郷土史編纂部の委員各位に対してもまた厚く感謝の意を表したのであります。

ここに学術調査が一応おわるにあたり、その過程・成果をまとめて報告書を刊行いたし、町史編纂の資料とするとともに、いささかでも埋蔵文化財の保護と活用に寄与したいと考える次第であります。

昭和三十三年二月十五日

愛知県知多郡知多町八幡公民館長 森 田 満 治

は し が き

西屋敷貝塚は知多半島で知られている縄文遺跡の一つである。

現在は隣接町村の統合により知多町と称しているが、かつて八幡町といった地域の郷土史編纂をこころざしてよりすでに数年になる。そしてその原始・古代に関する資料については、さきに、「八幡のむらのおいたち」(八幡町史資料第二集)を刊行し、そのころ学術調査を遂行した野崎・獅子懸遺跡の報告をかねながら、八幡の地域をもとにして知多半島における弥生文化の初頭に編年される関係により、ともすれば弥生文化に重点がかたむいていく懸念があった。とりわけ縄文文化については、西屋敷貝塚の調査が「八幡のむらのおいたち」脱稿のころようやく予察の段階であって、その調査報告を掲載することは不可能であった。本書はその責をふさぎ、かつまた発掘調査の成果をまとめた学術報告書である。

いま本書の稿なるに際し、発掘調査の学術担当者として協力いただいた日本考古学協会の久永春男氏、先史地理的考察のため現地を踏査をねがった名古屋大学地理学研究室の井関弘太郎氏、また調査後の整理にあたり自然遺物の考察を依頼しその成果を提供していただいた早稲田大学古生物学研究家の直良信夫氏の御好意にたいし厚く感謝の意を表したい。さらに地主の月東兼太郎・浅井繁太郎の両氏をはじめ地元各位の御理解も忘れることができない。

なお、本稿の執筆は第一章より第五章まで八幡公民館郷土史編纂部の杉崎章委員が担当した。また直良信夫・久永春男の両氏にも成果を提供していただき、第六章「西屋敷貝塚発掘の自然遺物」・第七章「西屋敷貝塚出土の縄文式土器について」としてそれぞれ所収できたことを附記する。

昭和三十三年一月三十一日

愛知県知多郡知多町

八幡公民館郷土史編纂部

西屋敷貝塚

第一章	位置と地形	1
第二章	調査の経過	2
第三章	遺跡	5
第四章	遺物	8
第五章	西屋敷貝塚の先史地理的考察	14
第六章	西屋敷貝塚発掘の自然遺物	16
第七章	西屋敷貝塚出土の縄文式土器について	22
挿図		
1	西屋敷貝塚附近の地籍図	5
2	第一トレンチの平面ならびに断面図	6
3	第二トレンチの平面ならびに断面図	7
4	上層出土の土器拓影	9
5	中層出土の土器拓影	10
6	下層出土の土器拓影	11
7	石器・骨角器・貝製品	12
8	西屋敷貝塚附近の地形	14
9	各遺跡発見の精製土器拓影	24
図版		
一、1	第一トレンチ東壁	2
2	表土採集の弥生式土器	3
3	石器・骨角器・貝製品	
4	上層出土の土器	
二、1	中層出土の土器	2
2	下層出土の土器	

第一章 位置と地形

西屋敷貝塚は、尾張国知多半島の伊勢湾にそつた愛知県知多郡知多町朝倉の谷にできた低地の縄文貝塚である。

名鉄電車の常滑線を利用し、新名古屋駅より南下すること約四十分にして海水浴場として知られる朝倉駅や古見駅に到着するが、貝塚はそのほぼ中間に位置しており、地籍の上では愛知県知多郡知多町新知字西屋敷八十六番地を中心とした約百坪の地域（柳園）である。

知多半島の侵蝕谷は、縄文早期から前期にかけて海進状態であつたころの堆積である海成粗砂層や、陸化してからの河川堆積物などにより埋められて、そのほとんどは低平な沖積低地となつており、谷口に近く現在の海岸線と併行して砂堆列が発達しているのが一般的であることは、すでに報告したことであり、またこれらの砂堆が「陸化直前の浅海底において堆積形成された沿岸州が、海退期にあたり地上にすがたをあらわしたものである」（註一）ことも指摘しておいた。

西屋敷貝塚のある朝倉の谷においても、侵蝕谷の陸化前後における浅海底の地形変化は一般的である。すなわち谷の出口には砂堆が発達して現在の海岸線となつており、砂堆でふさがれた奥は深い湿地となつており、貝塚はその湿地に面し砂堆の内縁にそつて細長くつくられており、現在の海岸までの距離は約二百米である。

遺跡を中央の低地にはさんだ両側の丘陵は、いずれも高さ二十米前後の小丘であり、その地質はすべて第三紀新層に属し、尾張南部地域で松沢親氏により尾張夾炭層と名づけられているものに比定されてお

り、けずりとられた丘陵の断面には亜炭層をはさんだ粘土層や砂層が互層をなしてみとめられる。さらに丘陵の稜線に近い部分はおなじく第三紀新層のより新しい猪高層に對比される礫層でおおわれている。

そして現在の谷底は低平な水田となつていますが、谷の中央で深井戸をついたおりの記録を調査してみると、現在の地表の下には今の丘陵の起伏に相当するようなけわしい侵蝕谷の原地形がかくれていることを示して、かつての侵蝕作用が如何にはげしかったかを知るのである。そうした起伏にとんだ侵蝕谷の原地形は、縄文文化の早期・前期から中期にわたる海進の時期にあたり、海底堆積による粗砂や貝まじりの粘土層がつもつて一様につつまれてしまつたものである。この谷の海退期における海水面の高さは、現在のそれよりも数米は高かつたものと考えられていて、西屋敷貝塚の北東約五十米の地点で、丘陵のすそにそつて当時の海面を今なおみとめることができる。そしてその海退期において浅海底に形成された沿岸州が前述した砂堆であり、その後の海退期にあたりそのまま地上へあらわれたものである。

註

- 1 拙稿「八幡のむらのおいたち」（八幡町史資料第二集・八幡町史編纂会・一九五六）

第二章 調査の経過

知多半島にはすでにいくつかの縄文遺跡が知られており、研究調査の歴史も古くからはじまっている。さらに最近十年の間の調査により発見されて新しく加えられた遺跡の数も多いのであるが、それらの中でも西屋敷貝塚調査の仕事は最も新しいものである。

私どもが朝倉の砂堆に西屋敷貝塚の存在を知ったのは昭和三十年も晩秋のころであった。地主の月東兼太郎氏がさつまいもを貯蔵するために家屋の床下に穴を掘ったところ、多量の貝とともに土器や獣骨が発見されたのを、八幡公民館郷土史編纂部の前身である八幡町史編纂委員会の委員である花井重氏が知って、出土資料をその直後にもよおされた町主催の総合文化展に出品された。これが本貝塚発見の経緯である。

そのころ八幡町史編纂委員会では、知多半島における弥生文化創生期の代表的遺跡として、知多町八幡の野崎・獅子懸遺跡(註1)の調査ととりくんでいたのであるが、野崎遺跡調査の一日をさいて昭和三十年十二月二十八日の午後現地を踏査し、いもの貯蔵穴の南に一米平方の試掘坑をあけてみた。その地点では貝層の上部が数十年前の土木工事と推定される遺構により攪乱されていたのであるが、地表から四十三種の所に厚さ約十五種のレイシを主とした貝層下部が残っているのを確認し、貝層中から土器片や石鉄など縄文晩期の資料をうることもできた。西屋敷貝塚の資料がこの地域の研究資料として最も古いことを知り、八幡町史編纂委員会ではやがて日本考古学協会の久永

春男氏に学術指導を依頼して、昭和三十一年三月に発掘調査をはじめたのである。

第一次調査(昭和三十一年)

三月二十八日 晴 朝倉地域の町史編纂委員会委員である花井重・山口喜一の両氏とともに横須賀中学校郷土クラブ生徒の成田久義・野部敏一・小野清治・横井道康の諸君が早朝から調査に参加し、間もなく半田市の山本善輔氏、名古屋から紅村弘氏も来援された。

トレンチを設定する地点をもとめて敷地点を試練した結果、最初に遺跡を発見した月東兼太郎氏の宅地が広範囲に擾乱されているのを知った。そこで東につづいた浅井繁太郎氏宅の家屋西の畑に発掘地を遊定して、幅一米・長さ五米の南北に長いトレンチをあげた。全体の表土をはがすとともに、トレンチの北西部二米は基盤の黄褐色砂層まで掘りすすんだ。混貝土層・純貝層・混土貝層と層序が上から順次にかさなっているのをみとめ、それぞれの層序にわけて出土資料を採集した。さらに純貝層の土器は、貝層の不整合により上半と下半にわけてみたが、純貝層の上下はもろん混貝土層との間にも、とりあげるような土器型式の変化はみられなかった。これらの土器はいずれも縄文晩期のものであるが、下層の混土貝層の土器はきわだった特徴をもっており、口縁部の肥厚した部分に半截竹管や棒状器具による刺突・押引などの施文をもっていた。

三月二十九日 晴 前日来の参加者、花井・山口・山本の諸氏や成田・野部・小野・横井の諸君のほか、今日は学術指導を依頼した久永春男氏が到着され、また師崎中学校教諭の磯部幸男氏も参加した。第一日に調査したトレンチの南東部三米を掘りすすめると、南東端

に近く混貝土層の上にあたりさらに新しい貝層があらわれた。この上部貝層から出土する土器はほとんどすべてが条痕により整形されたもので、この地方における縄文式土器終末の型式である水神平式土器に近いものであった。

第一日の調査で層序にわけて資料を採集したが、土器型式に差異をみとめることができなかった混貝土層と純貝層の関係を留意して観察してみると、両者の層序の中には明瞭な区別が存在せず、上部になるにしたがい漸次に土の混入が多くなるという状態であり、堆積の時期としては西屋敷貝塚中層として一括すべきであることを知った。

トレンチの北西部ではそれ程ではなかったが、南東部のさらに端の近くになると各層序が急に低くなっており、南東端では基礎の黄褐色砂層は青灰色と変化しておちこんでいる。そして上層の上部貝層のあらわれた地点附近は、下層の混貝土層が堆積していた時期にはいまだ湿地の中であり、混貝土層は斜面からくずれおちて水中堆積の状態を示す黒泥土層となつてつづいているなど、砂堆の各層序がもつ年代の間における微地形の変化をあらわしている。

第二次調査（昭和三十三年）

第一次調査の資料を整理した結果、西屋敷貝塚の出土資料は土器型式の上から、上部貝層を上層とし、混貝土層と純貝層を中層、さらに混貝土層を下層として三つの時期に分けることができた。しかし多量の粗製土器にもかかわらず、他地域の土器と対比して年代を確定しうるような精製土器の資料は中層の小片一個にすぎない点と、低地にある縄文遺跡として先史地理的にも調査の不十分を知ったので第二次調査を計画した。

このころ八幡町史編纂委員会は町村合併により差戻の解散をしていたのであるが、八幡公民館郷土史編纂部として前者の事業をひきついたのである。今度の調査には最初の西屋敷貝塚の試掘にも参加した芳賀陽氏がその後八幡中学校教諭として着任し、おなじく八幡公民館郷土史編纂部委員として参加できるようになったことは、私どもの最も幸いとするところであった。

一月十三日 晴 遺跡が半農半漁の密集した民家のせまい宅地内にひろがっているので、攪乱されていない地点をみいだすのに困難を感じた。敷地点を試掘して遺跡の縄年別の範囲を知るとともに、このたびは第一トレンチの西方約七米の所で、月東・浅井両家の境界となつていて浅い溝の中に長く掘ることにきめた。

一月十四日 雨 天候不良で仕事がかどらない。芳賀陽氏とともに民家の中にはいり、いも穴などをしらべて貝塚の分布と層序を観察した。貝層は砂堆の縁にそつて幅せまく長く分布していることがあきらかとなった。

一月十五日 晴 朝来いまだ雨がのこり条件はあまりよくなかったが、前夜から到着された久永春男氏と地元の花井・山口・芳賀の各委員をはじめ、横須賀中学校生徒の成田久義・小野清治の両君さらに瀬戸市幡山東小学校教諭の宮石宗弘氏の参加をえて発掘を開始、作業を続行した。

第二トレンチは第一次調査のトレンチの西方約七米の所に併行して、長さ四・五米で幅一・五米の大きさである。

この第二トレンチにおいても表土のすぐ直下から第一トレンチにおける中層の混貝土層があらわれてきたが、その下の純貝層はトレンチ

の中央で最も厚く、北西へいくにしたがってうすくなり、トレンチの北西端では遂になくなっていた。

そして混貝土層・純貝層の両方から期待していた精製土器の資料を檢出することができた。まず混貝土層からは工字文または雷文に類似した文様をきざんだ文様帯につづきこまかい縄文をもつ土器が出土し、それと併出して口縁部に縄文をもちその下に雷文様の施文がある丹塗りの土器もうるることができた。つづく純貝層からも後者に類似した雷文をもった土器がみとめられ、混貝土層・純貝層の両層における年代差は非常に接近したものと考えられる。純貝層の下には下層の混貝土層があらわれた。第一トレンチの下層と同様に、肥厚した口縁部に刺突文や押引文など目立った施文をもった土器が多くみられ、とくに好資料となったのは彫刻文様をもった亀ヶ岡式類似の精製土器であり、他地域の土器と年代の対比ができるもので混貝土層・純貝層のそれにやや先行する型式と考えられた。

トレンチの北西端に近く純貝層の中から、大海亀の甲が発見されたほか、黒鯛がとくに目をひいたが魚骨が細片となって多くみとめられ慎重に採集した。

第二トレンチの予定した作業がおわってから、第一トレンチでみとめられた低湿地への遷移点を確かめるため、さらに南東へ向ってトレンチを延長してみたが、予想した地点はその後の植樹のため攪乱されていて、目的をはたすことができなかつた。

三月二十六日 晴 名古屋大学地理学教室の井関弘太郎氏の現地踏査をねがい、芳賀陽・田中稔両氏とともに西屋敷貝塚周辺の地形調査をした。西屋敷貝塚の立地は谷一つ北へだてた八幡の谷における野

崎・獅子懸遺跡とおなじく、侵蝕谷をふさいだ砂堆の内側にそって形成されたものであり、第一次調査のおり第一トレンチの表土層の中から数片の弥生式土器を採集したが、このことは西屋敷の人々が縄文晚期から弥生文化の時代までひきつづき住んでいたことを示している。他の遺跡の人々の多くが弥生文化をうけいれてのちに低地へ移住しているのに対し、ここではそのままの位置で弥生文化へ移行していることを知ったのである。

註 1 拙稿「野崎遺跡・獅子懸遺跡」(前掲「八幡のむらのおいたち」所収)

野崎・獅子懸遺跡の出土土器から野崎Ⅰ期(朝日式・水袖草式B類併行)―野崎Ⅱ期(貝田町式・瓜棚式併行)―野崎Ⅲ期(外土居式・下長山式併行)と知多半島の弥生文化前期・中期を三期に編年し、とくに野崎Ⅱ期の土器を獅子懸式土器として提唱したものである。

第三章 遺 跡

西屋敷貝塚は砂堆の内側の湿地に面して位置し、比高三米足らずの低地にある。現在では砂堆の上に集落が発達しているため地表面はならされているが、もともと砂堆は満鐘形をなしていたものであり、貝塚は海岸とは反対側の傾斜面に形成されたものである。貝塚は砂堆の縁にそって長さ約七十米・幅は約十米と細長く分布しているが、調査した両トレンチは貝塚のほぼ中央で砂堆の方向に対し直角に二本併行して設定した。そして表土の下に第一トレンチでは四層（挿図2）、第二トレンチでは三層からなる文化層の層序（挿図3）を発見したのである。

すなわち第一トレンチは砂堆の端から約四米のへだたりをおいて発掘したのであるが、トレンチの南東端ですべてに各層序は急傾斜をなして低くなっており、当時の砂堆の端はトレンチ南東端の地点であることを示している。層序は上から上部貝層・褐色混貝土層・純貝層・黒褐色混貝土層と順次に堆積しており、とくに上部貝層はトレンチの南東端でのみみとめられるものである。そして第二トレンチでは上部貝層が存したと推定され、かつての砂堆の端と考えられる附近が植樹のため攪乱されていて、上部貝層の存在を確認することはできなかった。すなわちこの地点では上から褐色混貝土層・純貝層・黒褐色混貝土層の三層である。

そして西屋敷貝塚における各層序はすべて縄文晩期に属するものであるが、層序にわけて採集した土器の型式から大きく上・中・下の三層

にわけることができる。上層は第二トレンチではみることができなかったが第一トレンチの南東端でみられる上部貝層である。中層は褐色混貝土層と純貝層の両層よりなっており、とくに第一トレンチでは混土率の比重が漸移するという状態を確かめた。さらに下層は両トレンチで黒褐色混貝土層としてみとめられるものである。

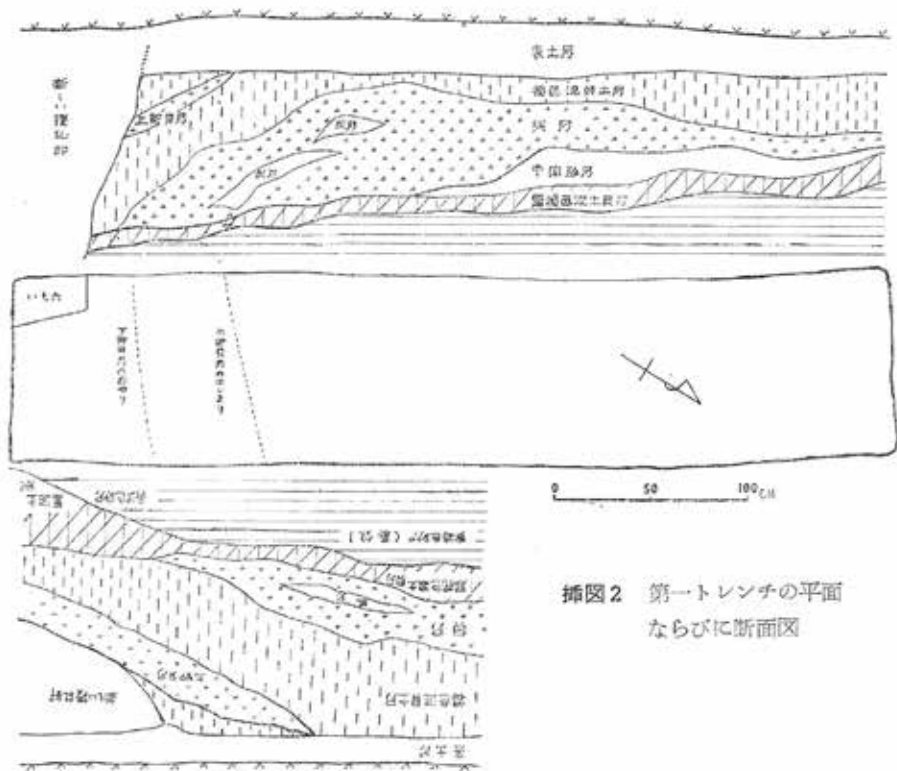
それらの上・中・下の各層序はそのまま年代差を示しているものもあるが、第一トレンチ南東端の層序をうかがうことにより、西屋敷貝塚の層序の各年代の間にも砂堆の砂がくずれおちて、砂堆背後の淡水の低湿地となっている沼地がわずかずつではあるがうまつていっているという微地形の変化を知るのである。すなわち上層の上部貝層が



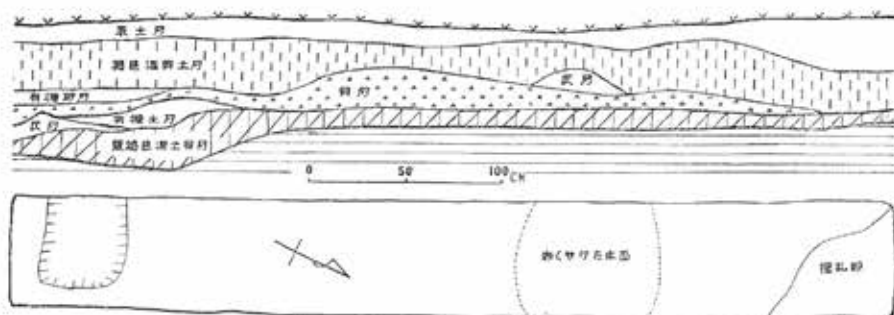
愛知県知多郡知多町新知
挿図1 西屋敷貝塚附近の地籍図
(貝塚範圍と発掘坑)

急傾斜をなして低くなっている附近の下層の堆積状態をみると、禾本科の植物などが腐蝕した有機分の多い黒泥砂層の中へ混土貝層の資料がころげおちており、下層の基盤の黄褐色砂層がその部分では青灰色砂層となっておちこんでいることとともに、下層が堆積した時期には未だ陸化せず淡水の低湿地の端であったことを物語っている。そして中層下部の純貝層も急傾斜の末端は貝層がなくなっており、その上部で比較的に礫の多い混土貝層をへだてて上部貝層がわずかにかさなりながらはじまっている状態である。

発掘における両トレンチの層序の観察から、上層をなしている上部貝層は砂堆の南東端近くにおいてのみ分布していることはすでに述べたことであり、中層下部の純貝層の両端も南東端は第一トレンチで北西端は第二トレンチにおいてそれぞれ確認することができた。そして下層の暗褐色混土貝層は比較的うすく普遍的に分布していたが、第一トレンチの中央部や第二トレンチの南東端近くでやや厚くなつており、月東氏宅のいも穴より採集した資料の中には下層と推定される土器が多くふくまれているにもかかわらず、その南方数米の試験点では下層の層序はのびていなくてその資料をみとめることができなかった。これらの事実を総合して考えると両トレンチを設定した発掘点附近が、各層序堆積のはば中心部にあつていることを知るのである。そして第二トレンチでは下層の床面に焼土のひろがりを見出し、中層においては固くしまった灰層をみとめた。深く追究すれば住居址の遺構を調



挿図2 第一トレンチの平面ならびに断面図



挿図3 第二トレンチの平面ならびに断面図

査できる可能性を知ったのであるが、一方は家屋の床下にはいり他方は耕作で攪乱されており、それを果すことはできなかった。

そして貝塚のある砂堆と丘陵との間に谷の奥深くひろがっていたであろう沼地のあとは、貝塚の前面の低地において現在は水田となつている附近の表土の下から、黒泥土層の状態で見とめることができる。試掘調査の結果、第一トレンチの南東端で黒泥土層と砂堆からくずれおちた砂とがまざりあっていた附近が、沼地の水打ぎわであったことを確認した。

さらに発掘した範囲内では、その文化層を随かめることができなかつたが、さきのべた縄文晩期文化の時代につづく弥生文化の時

代にも、貝塚の周辺またはその一部とかさなりながら、集落がいとなまれていたものらしく、長床式と考えられる弥生式土器片(図版二)がより新しい古墳時代以降の土器片とともに、表土層の中から攪乱状態で採集されたことからもうかがうことができる。

第四章 遺 物

西屋敷貝塚の発掘において検出することをえた自然遺物については、貝類の数量的な種類表とともに、獣骨・魚骨の検量を直良信夫氏のもとにとどけて調査分析を委嘱した。その成果については別稿の「西屋敷貝塚発掘の自然遺物」と題する直良氏の報告を参照されたい。

そして土器・石器・骨角器・貝製品などの人工遺物については次の通りである。

一、土 器

発掘調査により出土した土器はほとんどすべて縄文式土器に属するものであるが、第一トレンチの表土層から出土した土器の中には、わずかな量ではあるが、弥生式土器や須恵器の資料がみとめられた。弥生式土器は長床式(註1)の資料(図版一)であり、須恵器は古墳時代後期のもので蓋坏がもっとも多い。

そして表土層の下に第一トレンチでは五層にわけて採集し、また第二トレンチでも三層にわけて調査した資料はいずれも縄文式土器であり、その量は別表に示した通りである。

第一トレンチでみとめられる各層序の資料は、その土器型式の特徴から大きく三つにわけることができる。すなわち上部貝層の上層と、混貝土層・純貝層の上半と下半の中層、さらに下層は混土貝層である。中層の純貝層はわずかな不整合面より上半と下半にわけて採集したのであるが土器型式には差異がなかった。なお混貝土層と純貝層も漸移

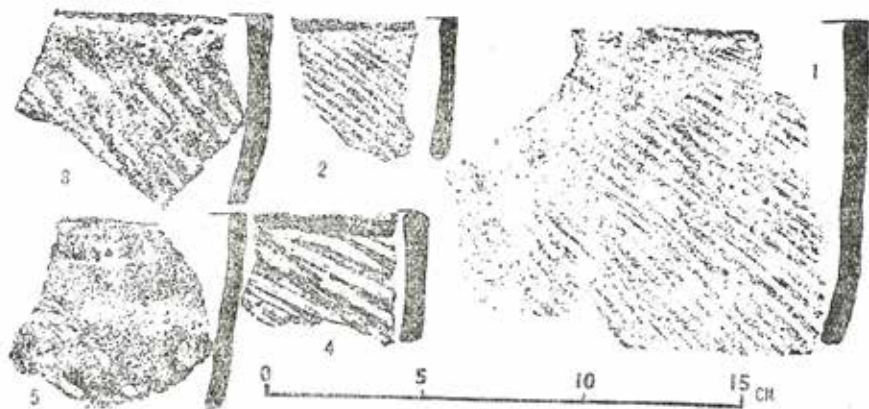
西屋敷貝塚採集土器片数量表

ト レン チ 名	層序別		上層出土の土器		中層出土の土器		下層出土の土器	
	部	類	有文	無文	有文	無文	有文	無文
			有文		無文		有文	
第 一 ト レン チ	口	縁	0	17	17	139	17	30
		胴	0	73	3	2216	0	401
		底	2	1	2	20	0	5
第 二 ト レン チ	口	縁			10	22	15	23
		胴			4	625	2	286
		底			3	6	0	5
層序別土器片集計			2	91	39	3028	34	750

的な変化であり、上の方の部分がその後になり混土率が高くなったにすぎなくて、もちろん土器型式の上では中層として一括した。また第二トレンチにおける三層も上の二層は第一トレンチの中層に相当しており、さらに下の

混土貝層は下層と併行している。
つぎに上層・中層・下層と大別した資料について、その土器型式の概要を層序にしたがつて述べてみよう。

上層土器(挿図4・図版一参照)この貝層が第一トレンチの南東端近くにおいてのみ発見される関係で、採集された土器の量は比較的少量であり、すべて口縁部が直口をなした深鉢形の粗製土



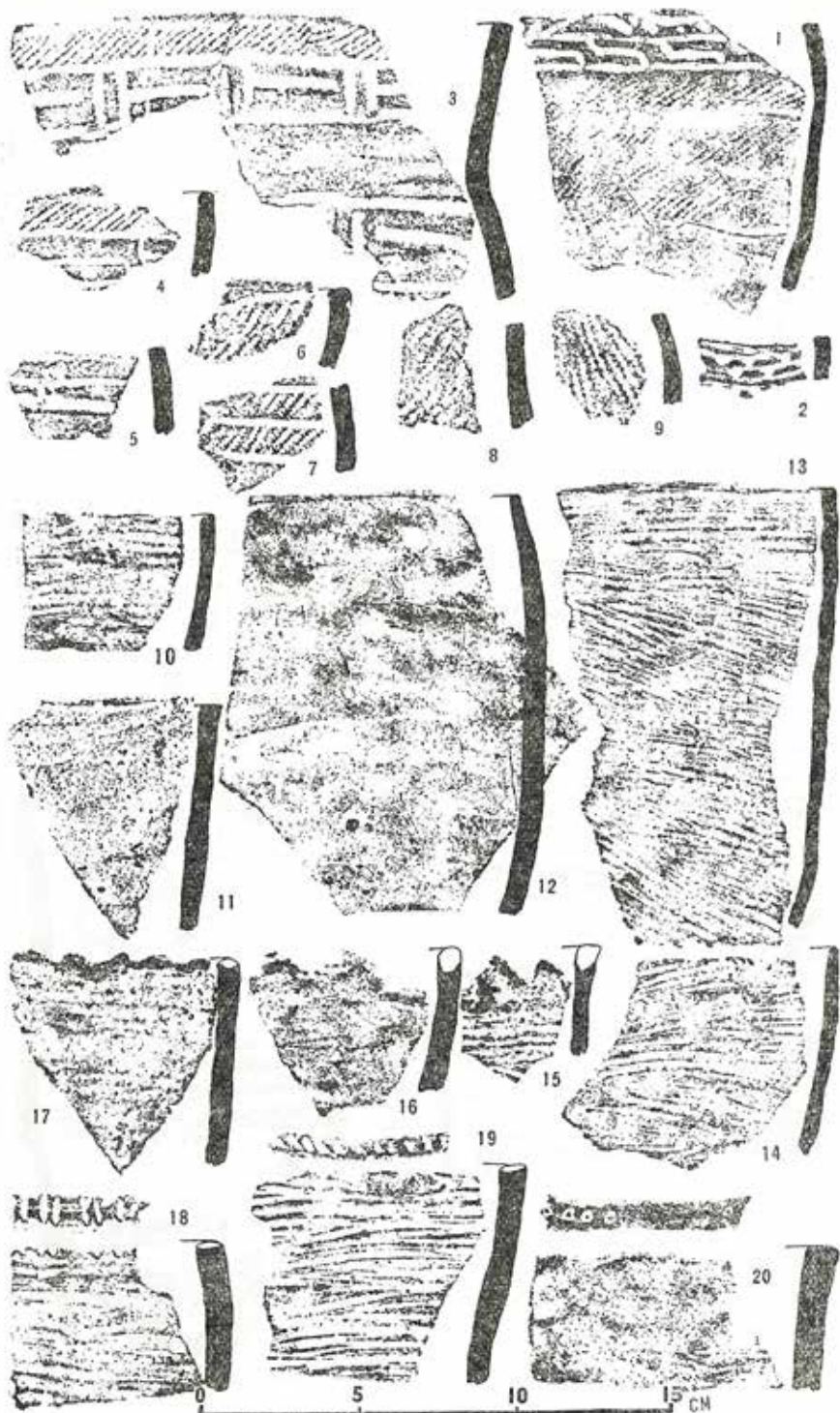
挿図4 上層出土の土器拓影

器であって、精製土器是一片もなかった。無文粗面のものであるが過半数の土器には条痕が加えられており、口縁端にわずかの無文帯をのこして右傾した単方向のあらい条痕により整形されている例(挿図4の1~4)が目をひいている。他の遺跡の精製土器とつながりをもつ資料が出土していないので、編年の対比が困難であるが、この地域で縄文式土器の伝統をもつ最後の型式である水神平式土器の祖型といったすがた

であろう。

中層土器(挿図5・図版二参照) 両トレンチを通じて最も多量の資料を採集することができたものである。第一トレンチでは純貝層の上部が混土率が高くて混貝土層となっているが、土器形式は全く純貝層と変化がなく、また純貝層もわずかな不整合面により上半・下半にわけてみたが、両者の間にとりあげるような変化をみとめることはできなかった。さらに第二トレンチでは混貝土層と純貝層の二つの生活期に区別したが、両者から出土した精製土器や、地方色をもった土器であっても編年の位置を比定しうる資料から考えると、二つの生活期の時間的差異は非常に接近したものであり、中層土器として概括してさしつかえないものであった。

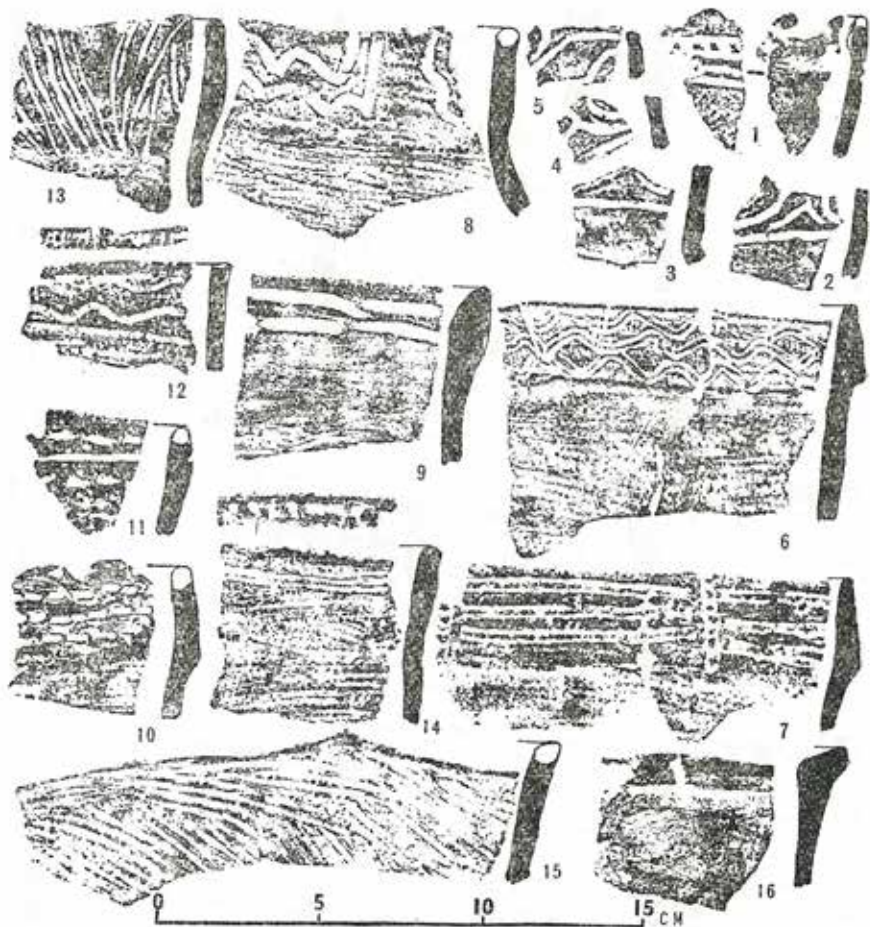
採集しえた土器資料は粗製無文の土器と、土層の土器ではあるが文様をほどこされているいわば並製の土器、それからごく稀れにしか検出しないが他地域の土器と強いつながりをもっている精製土器とにわけて考えることができる。粗製の無文土器は出土した土器の中で圧倒的な量をもつものであり、器形は口縁部が直口をなした水平の深鉢形で平底のものがほとんどであるが、口縁部がわずかに外反する例や大きく波状をなしたり口縁端に山形突起をもつもの(挿図5の15・16)もみられる。土器の底部の中には木の葉文や網代の文様をもつものが約半数みとめられ一部にはあけ底気味の例がある。そして胴部は横位の条痕で整形されているものも相当量みうけられる。並製有文の土器の例の中には個体にして二・三の発見例ではあるが、比較的あらい縄文(挿図5の8・9)やごくこまかい撚糸文様を土器面全体にもつものをもとめることができるが、ほとんどの資料は口唇部のみ施



神岡5 中層出土の土器拓影

文をもっているもの(挿図5の17、20)である。口唇部の文様は施文具により棒状器具・櫛状器具および竹管によるものと三つにわけることができる。前二者の例はおなじ程度の比で発見される量も多いが、竹管による円点文の例は数例にしかみとめることができない。棒状器具による庄痕はその施文の方法により漉波状となったものもあり、櫛による施文の多くは刺突文である。胴部は大部分が無文であるが条痕を加えた例がわずかにふくまれる。

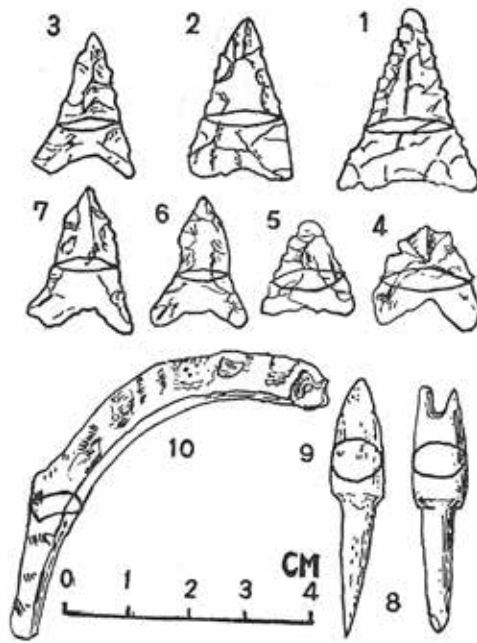
そして精製土器の資料は数例である。第一トレンチからは鈍貝層下半より土器頭部にあたる一例(挿図5の2)のみであり入組文様をきざまれた小片である。しかし第二トレンチでは良好な資料がえられた。すなわち第一層では口縁部にそって孤線の中に列点と沈線を組合せた文様や、さらに工字文または雷文に類似した文様を彫刻風に施したもので、それらの、文様帯につづいて下部はこまかい縞文地となつていて黒色を呈した資料(挿図5の1)で



挿図6 下層出土の土器拓影

亀ヶ岡式土器との関連を考えられる土器である。そしてまた第二トレンチでは精製土器というよりはこの地域特有の施文をもつ土器として、一層と二層の両面より口縁部に縄文を施し、その下につづいて雷文風の文様をもった丹塗りの土器(挿図5の3~7)が出土して、他遺跡との年代の対比を可能とってきた。

下層土器(挿図6・図版二参照) 両トレンチの下層をなしている混土貝層の土器である。粗製無文の土器については中層のそれと同様であり、条痕を加えられている土器も相当あるがその中には口縁部が波状をなして器形がととのっている例もある。しかし並製土器に対する量の比はずっと減少して少量となっている。



挿図7 石器・骨角器・貝製品
(1~7) (8・9) (10)

並製有文土器になると中層土器とは様相が一変してくる。すなわち並製有文土器の口縁部破片三十二個体のうち口縁端にのみ施文をもつ四例をのぞいて、二十八個体は口縁部全体に施文をめぐらし、うち十六個体はさらに施文帯をなしている口縁部が肥厚している。器形は水平の口縁部がわずかに外方へひろがった深鉢形が多く、文様は施文具により半截竹管と棒状器具によるそれぞれ直線・波線・押し文などの文様が一般的である。特徴のあるものを示してみると、口縁部がくの字状に内彎した一例は半截竹管による縦位の短線で数ヶ所区切った中間を、おなじ器具により横線を三条めぐらしているもの(挿図6の7)。また半截竹管による不規則な波線文をもった一個体はウミニナをころがした縦縄文を地文としている(挿図6の6)。棒描きの例の中には口縁部が波状をなして突起した部分の先端には棒状器具によるおさえがあり、二条の棒描きによる不規則な波状がその突起部のみであるが、口縁部が帯状に肥厚していて、その部分に篋状の鋭い器具による左傾または右傾の斜線を文様としてもった土器(挿図6の13)がある。

さらに精製土器はわずかであるが、中層のそれと同様に口縁部に() として彫刻文様の施文帯をもち、その下に縄文地がつづいている一例は黒色を呈して口縁部の内側に一条の沈線をめぐらしている(挿図6の1)。ほかに小さい土器片となった一群の土器で、土器型式は明らかでないが貝殻による太い沈線をめぐらした文様の資料(挿図6の2~5)が採集されている。

二、石器

西屋敷貝塚の両トレンチならびに試掘坑より発見せられた石鏃としては、石鏃七例（挿図7）が存するのみであるが、その出土層の内訳はつぎの通りである。

第一トレンチからは中層より二点と下層より一点の計三例であり、また第二トレンチからは中層より二点と下層より一点の三例である。ほかに最初の試掘において中層土器と伴出して一点採集している。

いずれもチャート製の無茎打製の石鏃であり、五例（挿図7の1、3、6、7）はとくに先端までするどい鋭角をなしている、断面は比較的にうすく扁平である。そして石鏃の原料となっている岩石は、もともと古成層の地帯で産するもので丘陵のすべてが第三紀層に属する知多半島にはこの層の露頭は存在しない。遺跡の近くで産して産地をもとめれば尾張北部の犬山か定光寺の地域または海をわたって濑美半島にいかなばならない。しかし石鏃の材料となる程度の岩石はその露頭する地域にもとめなくとも、小さいかたまりで充分であり、遺跡周辺の猪高層に対比される丘陵に大小の礫の形で存在し容易に手にいれることのできるものである。

三、骨角器・貝製品

西屋敷貝塚の両トレンチより発見された骨角器や貝製品は全部で三例（挿図7）である。

第一トレンチでは中層よりアカニシ製の貝輪が一例と、下層の混土貝層より鹿角製の矢の根ばさみが一例であり、第二トレンチでは下層の混土貝層より鹿角製の鏃状製品の一例の資料があった。

アカニシ製の貝輪（挿図7の10）は完成品の破片で、重厚な感じをもち磨きがかかっている。

鹿角製の矢の根ばさみ（挿図7の8）は完形品である。茎をもち身の先端中央部を深さ五程編えくりとって叉状にしたもので、石鏃をはさむのにもちいたと考えられている（註2）。全長四厘で茎の長さは二厘強であり、断面は楕円形で最大径一厘の身の部分とは段をなして細くけずってある。

さらに鹿角製の鏃状製品の一例（挿図7の9）は前述の矢の根ばさみと形状が類似しており、茎はもっているが、身の先端に割目のない点がちがっている。身の腹部はややかけているが、断面の形はほぼまるく先端はするどく研磨してあり、大きさは全長四厘で茎の部分は身の部分よりもやや長い。

註

- 1 久永春男「各地域の弥生式土器—東海—」（日本考古学講座4『弥生文化』所収・一九五五）
- 2 山内清男「吉胡貝塚—第二トレンチ—」（埋蔵文化財発掘調査報告第一『吉胡貝塚』所収・一九五二）

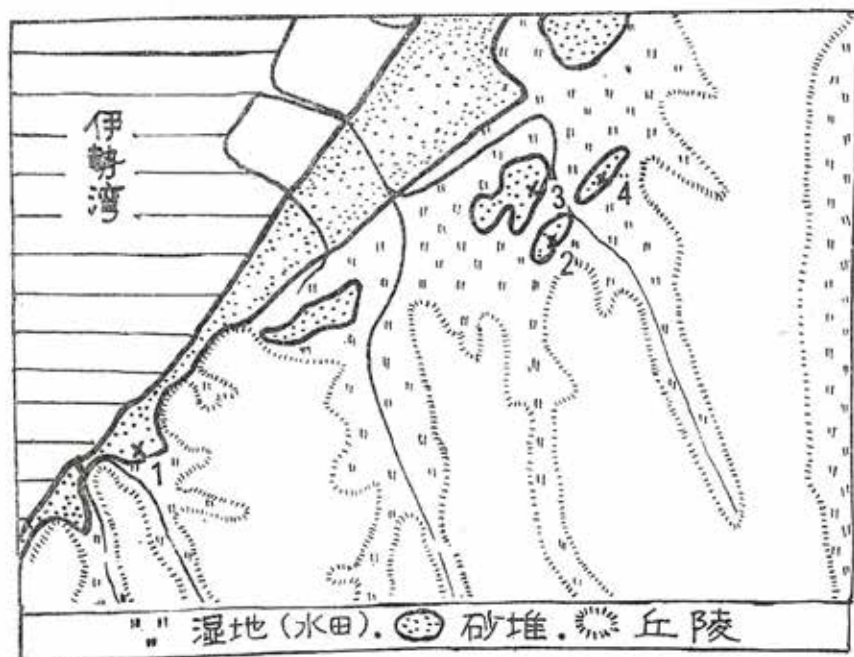
第五章 西屋敷貝塚の先史地理的

考察

知多半島における縄文文化期の遺跡は戦前より相当その分布が知られていたが、とくにここ数年の間に新しく加えられた遺跡の数も多い。しかしそれらのほとんどが台地の上に位置しており、縄文遺跡で沖積低地にある例はわずかである。すなわち西知多における本遺跡をのぞいては、南知多の師崎町片名の谷における咲畑貝塚（縄文文化中期）と田中島遺跡（縄文文化後晩期）の二例にすぎない。

南知多における咲畑・田中島の二遺跡が立地する浜境列は、谷に海がまだ入りこんでいたころ打ちあげられた海岸汀線をあらわすマウンドである。ところが西屋敷貝塚がある八幡・横須賀地方の谷においては、波打ちわの浜境というよりは海中における堆積を示しているのである。いまだ完全に陸化する前の浅海底にあるころ、すでに沿岸州として形成されていたものが、海退にあたり陸上に砂堆列として姿をあらわしたものである。

そして縄文文化中期の加曾利B式に比定される咲畑貝塚が立地する浜境は谷のもつとも異にあって、侵蝕谷における海進の限界をあらわしている。濃尾平野においても縄文文化中期は養老山脈にそった岐阜県の庭田貝塚や名古屋台地北部の長久寺貝塚まで海がはいった時期でもある。しかし海面の上昇運動はすでに停止されていたようであり、関東地方ではおなじく縄文中



挿図8 西屋敷貝塚附近の地形

(1. 西屋敷貝塚、2. 野崎遺跡、3. 獅子懸遺跡、4. 柳ヶ坪遺跡)

期の遺跡で加曾利E式の土器を出す千葉県姥山遺跡の時期には、すでに海退がはじまっているといわれている。咲畑貝塚においても海岸線が海進の頂点のところに形成された浜境からわずかに後退して、その浜境上に集落生活が可能となったことを示している。しかしこうした海進・海退の条件は局地的な地盤の隆起・沈降や、侵蝕谷それぞれの地形に支配されて、具体的にあらわれてくる姿は地域により一様ではない。すなわち西屋敷貝塚とはほとんど時期を同じくした知多半島の縄文遺跡のうち、横須賀町の高御前遺跡のように丘陵の内部に遺跡がある例は別としても、師崎町片名の谷の田中島遺跡・大野谷の東畑貝塚・阿久比谷における半田市乙川の西之宮貝塚などの遺跡が、それぞれの谷でもっている集落立地の条件は異なっている。半田市の西之宮貝塚や知多町の東畑貝塚の場合はいまだ谷の奥深く海が入りこんでいる状態であり、遺跡が湾に面した台地の端にあるのに対して、集落は沖積低地の砂堆または浜境の上に形成されている状態である。

そして西屋敷貝塚の立地する微地形を、谷一つとなりの弥生文化の集落である野崎・獅子懸・柳ヶ坪の遺跡群のそれと対比した場合に、両者が全くおなじ地形環境をそなえていることを知るのである。(挿図8) 遺跡のある砂堆の後背地はいずれも深い湿地をなしており、禾本科の植物が密生していた痕跡を表土の下にみとめられる黒泥土層が物語っている。このことはまた別稿「西屋敷貝塚発掘の自然遺物」の中で直良信天氏が「偶蹄類にあつては総量からみると鹿より猪の方がはるかに量的に多かつたらしく考えられる。猪は湿地地の多い低山性林地を好み」「猪類の棲息に好条件を具有していた湿地地の多い丘陵性地の地形が四周に展開していたのではなかつたらうかと推察される」

(註1)と指摘しておられるのに通じている。

またかつて「八幡のむらのおいたち」でのべたごとく、知多半島の弥生文化期における代表的な歴史集落として野崎・獅子懸・柳ヶ坪の各遺跡は、砂堆の奥の後背湿地を自然灌漑の可能な水田農耕の場として、それに面した砂堆の内側に集落を形成しているのであるが、そうした低地集落の伝統は縄文晩期中葉を下層とした西屋敷貝塚のころ、すでにともとめることができるのである。しかも西屋敷貝塚の上層土器と、水神平式B類の土器に比定される野崎遺跡第1群の土器との間には、その様式においてわずかの飛躍しかみとめられないという事実は、採集生活の時代のころすでに農耕文化の生活に移行できる条件がなりたっていたことを示すものであり、井関弘太郎氏が「縄文後晩期における遺跡の低湿地進出がどのような目的で行われたかは不明であるが、当時の集落がこのような位置にあったことは、水稻農業を受入れる非常な好条件にあつたといえる。このことは日本農業の初期に水稻栽培が急速に伝播しえた重要な条件になつたことが考えられる」(註2)といわれ、過低湿な土地にのぞむ初期弥生文化の集落立地の方が、むしろ縄文後晩期の立地様式を踏襲しているのであると論じておられることを裏証するものである。しかも西屋敷貝塚の表土層において、数片の弥生式土器(図版一)を採集しえたことは他の時代の資料と攪乱状態で見えられたとはいえ、おなじ位置でそのまま弥生文化をうけ継いでいたことを示すものである。(杉崎 章)

註

1 本書第六章所収

2 井関弘太郎「日本の初期農業集落の立地に関する若干の問題」(名古屋大学文学部研究論集Ⅵ・一九五三)

第六章 西屋敷貝塚発掘の自然遺物

自然遺物の種類 調査の結果、本遺跡からは、左表の自然遺物が検出された。

以上の如く、哺乳類四種（食肉類一種、偶蹄類二種、鯨類一種）、爬虫類二種、魚類七種、合計十三種である。

哺乳動物 哺乳類中のタヌキは、下顎骨片の遺存が多かった。古生

哺乳動物		
1	タヌキ	<i>Nyctercutes procyonoides viverrinus</i> Tem. et Sch.
2	イノシシ	<i>Sus leucomystax leucomystax</i> Tem. et Sch.
3	ニホンジカ	<i>Cervus nippon nippon</i> Temminck.
4	鯨の一種	Cetacea gen. et sp. indet.
爬虫類		
1	アオウミガメ	<i>Chelonia japonica</i> (Thunberg)
2	イシガメ	<i>Clemmys japonica</i> (Tem. et Sch.)
魚類		
1	アカエイ	<i>Dasyatis akajei</i> (Miiller et Henle)
2	スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i> (Cuv. et Vale.)
3	マダイ	<i>Pagrosomus major</i> (Tem. et Sch.)
4	クロダイ	<i>Sparus longispinis</i> (Tem. et Sch.)
5	イトヨリダイ?	<i>Nemipterus virgatus</i> (Houttuyn)?
6	トラフグ	<i>Sphoeroides</i> cfr. <i>rubripes</i> (Tem. et Sch.)
7	コチ	<i>Platycephalus indicus</i> (Linnaeus)

物学的には、下顎骨体の体高がやや低めで、長いのが特長のようである。凡て破損しているが、破損部のきず口からみると、何か鈍器のようなもので、たいてい打ち割った形跡が存する。中には又、食肉類がことさらにかじったように、考察される骨片もあり、資料は下顎骨体だけで、都合七個体分ほどであった。この数から判断してみると、実際にはもっと沢山、採捕されていたのではあるまいかと、考察されよう。タヌキの肉は、決して美味なものではない。が、この野獣は、常に人家の近くに棲息していて、夜間になると、人間の居住地帯に出没し、人目にふれることも一再ではない。したがって、人間の関心を惹くことは、どの野獣よりもその度が濃い。

このような関係から、とくに西屋敷貝塚人の注目をあつめたものではあるまいか、と推想されるのであるが、他面ではこの動物の毛皮が、どの野獣の毛皮よりも、優れていた点に、採捕の焦点が置かれていたろう、ということも見逃がしてはならない。本貝塚では、採捕されていた野獣の範囲が、甚だ狭隘であったにも拘らず、タヌキの採捕量が、案外高率を示していた事實は、特記に値することのように私考されるのである。

偶蹄類にあつては、総量からみると、鹿より猪の方が、はるかに量的に多かつたらしく考えられる。鹿も猪も、共に森林性野獣であるが、生態学的には、猪は湿沢地の多い低山性林地を好み、鹿は池沼にめぐまれた山地や、飲用水さえあれば、ときにはやや高燥な森林中にも棲息している。西屋敷貝塚営成当時の該地域の地形状態

は、遺跡及び遺跡近傍の実査を経ていない私には、不詳な点が甚だ多いのである。が、獸類の生活環境から想考してみると、むしろ猪類の棲息に好条件を具有していた、湿沢地の多い丘陵性の地形が、四周に展開していたのではなかつたらうかと想察される。そのために、割合に多く、猪狩が行われ、時によつては少し山奥に足を踏み入れて、鹿類にも興じていたように、想像されるのである。猪は♂とも、區別されることなく捕殺されている。しかし幼獣の遺骸が、何等発見されないところをみると、non-papaの採捕は、おたがいの間に禁じられていたのかしれない。実的に考えてみると、同じ成獣でも、♂は♀に比して、はるかに利用価値が大きい。ことに、♂の牙は、尖鋭な牙器を作製する場合には、是非とも必要な資材といえよう。現に本遺跡には、猪牙を縦ざきにして生じたその裂片が、発見されている。とはいへ鹿は又、鹿のもつ魅力があつて、肉は猪より淡白な食味を有し、毛皮は猪のものより、より一層優秀性が強い。その上、掌骨は長めな骨器を作製するには何よりもよい原材であり、角は角器の原材としては、これまた欠くことのできない存在なのである。そのよい証拠には、鹿角に切痕痕をとどめた遺品が、相当量出土していることで、納得することができる。したがつて、行きがかり上では、採捕の目的が、若干異つていたものを含んでいたかもしれないが、結果としては、どちらを採捕してもよいとはいへ、できることならば、より必要を感じていた猪の方を、得やすい環境での仕事として、数多く捕殺していたものと考案しなければならぬ。とるには採つたが、それでもよりはずつと控えめに採られていた猪の、それから、当初は採ることをやめていた鹿の、の場合などは、何かそこに、当時の人々の

抱いていた宗教上の戒律でもあつて、進んで採捕することを思いとどまっていたと解しても、よいかもしれない。が、それ以上に、利用価値の問題が、数えあげられていたであろうことを、一度は想起してみることが肝要ではあるまいか。

鯨はいうまでもなく海産の獸類であるから、類毒性の遺跡に於て、その遺骸が発見されたことは当然であつたといえよう。が、本遺跡出土の遺体は、骨器の原材もしくは細工の途中に生成された層骨とみるべき逸点を有し、かつ発見された量が、僅かに一小破片であつたところからみると、あるいは、本貝塚人が採捕したものの遺骸の残片というよりは、骨器の原材として、他から流入した骨片であつたかもしれない。片片たる骨の小破片では、もとより種名を検索する資料とはなし難いが、イルカ科のもののような小形鯨類ではなく、相当柄の大きな、鯨類であつたとみるべきであらう。

鹿 虫 類 発掘された資料は、海産種（アオウミガメ）と陸水産種（イシガメ）である。どちらも亀であるところに、甚だ興味が残する。アオウミガメは、元來が外洋性のものであるが、夏期産卵のために、夜間砂浜などに、はい上つてくることがある。西暦數貝塚人は、いかなる際に、この海亀を採捕したかはわからないが、遺骸が破片となつた今日でさえも、少くとも三個体以上が数えられるから、実際にはもっと数多くのものを採捕していただろう。最も大きな破片である第二中央大形脊椎板は、右側辺が破損された現状ですらも、その幅が二三・五種、長さ八・五種、厚さ一・二種である。したがつて、この海亀の背甲は、甲のもの幅が僅に四十五種を越すほどの、大形種であつたとみるべきであらう。このような幅の広い背甲をもっている

としたら、その長さは五十五種以上のものになるから、見事な大魚であつたと、考想しなければならぬ。脊椎板の右側辺の内側には、鈍器でたたいた形跡が、明瞭にのこされている。肉を採る際に、この部分を傷つけて、背甲をこわしたものと考えてもよいかもしれない。生きていた時には、この部分は腹甲でかくされていた筈であるから、採殺するための一撃の跡とは考想されないのである。武器でたたかないまでも、魚類はすばやく体を転倒させると、それで無抵抗の状態を呈するから、採捕は極めて簡単に行われる。おそらく、当時の貝塚人は、現在南島諸地域の未開人が、常に行っているような、手なれたしぐさで、無雑作に採捕していたことだろう。砂浜に佃上して来た親魚をとっていた位であつたとしたら、その親魚が産んでいた卵なども当然砂中から掘り出して賞味していたとみてもよいだろう。海魚の卵は大変美味なものである。

イシガメは、陸水に棲んでいて、当時この動物は、日本の各地に分布していたが、貝塚からその遺骸が発掘される事は甚だ稀である。しかし、どういふものか、愛知県下の貝塚では、従来からしばしば示されている。本遺跡では、破片の個数としては六、七片がしられているので、個体としても、必ずしも少ないといふことはできない。破片から復原した背甲の大きさが、二十種を越すような大形のものも存する。したがって、よく考成した個体が、案外人々の眼を惹いていたとみななければならぬ。イシガメの背甲は、動物の死後は、縫合線から容易に分離する性状を有しているから、破片だけから、西屋敷貝塚人が、食用に供していたか否かを、決定づけることはできない。しかし、海魚を食用していた習慣から推量すると、イシガメも供食されて

いたと、みるべき拠点は十分に存するように考想される。現代人の生活では、イシガメは殆んど食用にされていない。が、貝塚の人々が、もし食用にしていたとすれば、甚だ美味の深い食性の変遷を、その間に見出すことができることにならう。

魚 類 発掘された魚骨の大部分は、砂泥性の海底を有する沿岸に棲息している魚類の遺骸であつた。ただ、マダイとイトヨリダイだけが、少々沖に出ないと採捕することのできない魚類といえよう。片々たる遺体から、私が査定することのできた種類は、上記の表にあげた七種であつたが、他に資料があまりにも細片であるために、判定の困難であつた標品が一、二点存する。これらは更に精査の上、種名を決定したい考であるが、ともかくも、貝塚人の食糧残遺物としての遺体の凡てが、毒魚であつて、陸水魚の遺骸が出土してはいないのは、注意すべきであらう。

以上の種類中、アカエイとコチは、底棲魚である。コチは、釣ることによつて、割合に簡単に採捕することができる。下顎骨が大きからして、体長が十五種ほどの小形のもの遺骸が少しく存するが、概して二十五種以上の大形魚が多かつたように考えられる。肉の味は淡白であるが、味に強いくせがないので、貝塚人の好食をはくしていたらしい。アカエイの遺体は、尾背上に存する鉤様を呈した有棘骨である。甚だ小形のものである点からみて、動物体の大きさは、せいぜい体長が二十種どまりのものではなかつたかと考想される。このような小さいアカエイは、干潮時砂浜に生じていた潮だまりの部分に、しばしば、とりのこされて棲息していることがあるから、かかる際には、棒片などで、撲殺すれば薬に捕えることができる。本遺跡出土の有棘

骨の先端が折損しているのは、あるいは、このような手段で尾部をねらってたたき殺して捕えていたことを物語っているのかもしれない。万が一、生時にこの尾背上の有棘骨で刺されたりすると、それは大変な被害を蒙ることになるので、魚類を採捕するコツに、熟達していた貝塚の人々には、その点は十分に味識されていたであろうと私考される。

トラフグと査定したものは、種名について、若干後考を要するものがあった。が、ナゴヤフグ *S. richetii* (Feminville) には大形なもので、仮りにトラフグに對比しておいた。この種のマフグ類は、海水の表層もしくは表層に近い部分を、常に游泳しているものである。したがって、漁獲は、縁釣によっていたと考えられる。このフグは多少毒性を有することが知られているが、現今、関東以西南では（東京近域ではあまり食用されていない）、美味として食用されているものである。本貝塚では、歯板のみを採りあげて数えてみても、十四个体を計上することができるので、冬期の珍味として、相当量のものを探捕されていたとみてもよいだろう。

タイ科の魚類としては、マダイとクロダイの遺骸が出土した。
(*マイ Sparusuricus Tem. et Sch.* や *チマイ Euphras japonicus Tanaka* は未定種である) この二種のタイの中、多出しているのはクロダイであった。上下及び顎骨の位置に關係することなく、顎骨の一標品を一個体として測定してみると、クロダイ十四に対して、マダイは一の出土率を示していることになる。即ち本遺跡ではクロダイが、絶對的に多量採取の立場にあったといえるのである。上瀬時などに川口でよく釣りあげることのできる魚類であるが、総じて、

日本の縄文式貝塚では、何処の遺跡にも、そしていつの文化期にあっても、どの魚類よりも多採されていた種類である。換言すれば、縄文文化期の文化人が、最好食していた魚類の代表種であった、ということができるわけである。顎骨の大きさからみて、体長が三十厘米に及ぶような大形な魚体のものを、常に採捕していたようであるが、稀に十五厘米にも満たない、カイズ級のものをも採っていた。部分骨も相当量出土しているが、魚鱗のみが、かたまって出土した例も存するので、食用にする際には、調理にさきだつて、鱗をこさぎとっていた事実を想起することができよう。同じクイ類でも、マダイとなると、クロダイとは生活圏を異にし、この方は、揚子江の繁茂した、清澄な潮流の岩礁地域に多棲している。そのために、この魚類を採捕するためには、若干沿岸からはなれた油合を、漁場としなければならぬことになる。が、全体的に魚類遺体の显示している当時の海洋学的事項は、西屋敷貝塚近傍に、このようなやや荒磯の海域を想定することは勿論許されない上に、本遺跡におけるマダイ遺体の出土量が、極めて微々たるものであったことに、思を至すと、マダイを採ることよりも、クロダイに対して、甚しく関心をよせていた人々であったことを察察することが肝要だと思ふ。イトヨリダイは、イシフネダイ科に属する魚類であつて、マダイ同様に沖漁でない、採捕することのできない種類である。

最後に記さねばならないスズキは、クロダイほどではないが、とにかくクロダイの生活圏に近い状態の海にすんでいるものである。概して、この魚類はとりよく、且つ美味なために、古今を通じて、日本人の好食する魚類となっている。ところが、本遺跡では、案外この種

の魚類の遺骨が少なく、採捕量が、常にクロダイにおされ勝ちであったことが、窺知される。

結 び 以上記述の諸事項を検討してみると、次ぎのような、結論が導き出される。

一、本遺跡の人々は、相当多量に陸獣を狩猟しておりながら、その採捕範囲が甚だ局限されていて狭く、そのために、種類が著しく少ない。しかもこれらの狩猟に際しては、猟犬をつかっていた証左に乏しい。これは縄文文化期の衆人としては、あまり他に類例のない生活形態といえよう。その猟域も、遺跡の近傍のみに限定されていたかの感が存する。

二、発掘された動物の遺骸が、当時の人々の食糧残渣の凡てを表示していると、看取するのは早計であるかもしれない。しかしながら、かかる多数の骨片中に、一片の鳥骨をも見出すことのできなかつた事實は、従来多くの貝塚発掘の自然遺物を調査し来たつた私としては、むしろ不思議な感を抱かざるを得ない。叢林を背に負い、海区（漁場）を前面に擁した生活立地のもとは、そこに鳥類の娯集を当然期待すべきであり、もしそれが事実に近い観察であつたとすれば、貝塚營成の人達が、食糧調達の一手段として、弓矢をとらないわけはなかつたであらうと、私には考想されるのである。

三、黒潮の岸を洗う太平洋岸の本遺跡地近域には、当時は砂浜が相当広域に亘つて展開していたことだろう。海波がしずかに砂をかむ夏の夜などには、これらの砂浜は、ウミガメの産卵場所として、好条件をそなえていたと考想すべきであらう。ウミガメは卵を産み落とすと、まもなく汀線をさして引きかえして行くが、かかる習性は、西屋敷貝

塚人に、ウミガメのよい機会を与えていたことにならう。更にまた、陸水棲のイシガメをも捕殺していたことから察すると、本貝塚人は、よほど魚狩の好きな人々であつたと窺ひなければならぬ。

四、マダイ及びイトヨリダイを除けば、他の多くの魚類は、多少淡水の注流されているような川口、もしくは陸岸に近接した砂泥性の浅海に棲息していた種類である。溜潮時には、深い所で三〜四尋の水深となつていた部分もあつたかもしれない。しかし干潮時には、砂泥性の海底が、肌をむき出しにして、黒々と横たわつていたことだろう。あげ潮時には、この潮のつて岸辺近くに群集する魚類を、釣りあげたことに精出していたことだろうが、干潮に際しては、もっぱら潮だまりの部分で、逃げおくれた魚類の採取に専念していたことだろう。かかる際には、あるいは「たて干し」式の漁法も講じられたであらうし、突刺し法による漁獲も、相当に敢行されていたと想像してもよいだろう。本遺跡出土の魚類の遺骸（ことに口腔部に）に、釣具による傷痕のみられないのは、網の使用を考想してもよいかもしれないが、その多くは、罾を利用した「たて干し」式漁法の実施を想定するのがあるいは穩当ではあるまいか。

五、遺跡の近域に陸水域の展開が、ある程度想定されるにもかかわらず、イシガメ以外の陸水棲動物の遺体の出土がないのは不思議といえよう。魚類及び貝類とも、現状においては、その資料を欠いている。これらの事實は、陸水漁業の不振を示すものであるか、あるいは又、その他に原因を有して、かかる漁業が成立し得なかつたものであるかが、今後の研究課題となることだろう。

後 記 本遺跡に於ける貝塚構成の軟体動物遺体については、そ

の二、三を検しただけで、全体のものに眼をとおすことができなかつた。しかし、発掘当時者である杉崎寛氏の教示によると、左表の軟体動物の遺体が、発掘されているということである。

軟体動物		動物
	斧足類	
1	カガネガイ	<i>Barbatia obturoides</i> (Nyst)
2	サトルボウ	<i>Anadara suvrenata</i> (Lischke)
3	マガガキ	<i>Ostrea laperousi</i> Schrenck
4	イタホガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i> Lischke
5	カガミガイ	<i>Dosinia japonica</i> (Reeve)
6	オキシジミ	<i>Cyclina orientalis</i> Sowerby
7	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Roding)
8	ウチムラサキ	<i>Saxidomus purpuratus</i> (Sowerby)
9	マテガイ	<i>Solen gouldi</i> Conrad
10	オオノガイ	<i>Mya japonica</i> Jay
	腹足類	
1	スガイ	<i>Turbo coronatus coreensis</i> Récluz
2	ツメタガイ	<i>Polynices didyma</i> (Roding)
3	ナガニシ	<i>Fusinus perplexus</i> (A. Adams)
4	レアイシ	<i>Purpura bronni</i> Dunker
5	アカニシ	<i>Rapana thomasiana</i> Crosse
	頭足類	
1	コウイカ	<i>Sepia escutenta</i> Hoyle(直良査定)

以上のように斧足類十種、腹足類五種、頭足類一種、合計十六種が知られていることになる。通観して感じられる点は、その殆んどすべてが、砂泥性の遺浅の海底に棲息している種類であるということである。

る。杉崎氏の教示によると、マガキとイタボガキが見かけの上では甚だ多量に採集されていて、カガミガイ、オキシジミ、マテガイ、オオノガイ、ツメタガイは少量、ウチムラサキは稀少であったという。マガキは淡水鹹水相混の地域に多いものであることからすれば、本貝塚が当時の海浜の何れの地点に所在していたかが、おのずから分明するところと思われる。が、そのマガキを主体とした貝塚中に、これまた、マガキとはかなり生態学的事項を異にしたイタボガキが、多いということとは、その間若干不審の点がないでもない。

しかし、ともかくも自然遺物全体の内容からみた場合、ひたすら、海産物の収集をもって、生業としていた人々であったことが納得され、常に海域の開拓に精進していたことが瞭然と判別されることは、興味深い事項といふべきであろう。

(一九五七、一一、七
早稲田大学古生物学研究室にて 直良 信夫)

第七章 西屋敷貝塚出土の縄文式土器について

西屋敷貝塚出土の縄文式土器は、それを包含する貝層の層序によって上層・中層・下層の三群におのずから分かれ、下層の混土貝層と中層の純貝層ならびに上層の純貝層との間には、それぞれ間層もはさまって、その間に堆積時間の中断が見られ、その堆積順に下層の土器がもつとも古く、中層の土器がそれに次ぎ、上層の土器はさらに年代が新しいものとしてよい。しかし発掘面積が狭く、採集し得た土器の量も多量でないので、上層・中層・下層の各層の土器の型式をつまびらかにするには、なお不十分をまぬがれないが、いちおうその型式的特徴を概観するには足る資料であった。

下層の混土貝層出土の土器は量はそれほど多くないが、他の層の土器に比較すると、無文土器に対する有文土器の比率が多いので、その諸特徴を知ることができる。それは無文または条痕を残して仕上げた粗製土器と、磨消縄文や彫刻的手法を用いた精製土器と、並製の縁帯文土器とから成る。精製土器には隣接する諸地域との共通意匠が見られるのに対して、並製土器のそれはむしろ濃尾平野特有の意匠とすべく、そして精製土器に比して多量に生産使用せられているので、これを指標としてその地域文化圏をあとづけることができる。その器形は、口辺部をくの字形に内側に屈折させるか又は口辺部のみを厚く作ってその外観を内側へ屈折させたものと同じ感じに作り、その口辺部

のみに文様を帯状にほどこした深鉢形であって、口縁部が大きく波状をなして高低するものもある。その縁帯文の施文具としては縦に割つた竹管の先端を用いた縦横の直線、弧線、波線、押引文、刺突列点文が愛用せられ、また地文として縄文とならんで、ウミニナやヘナタリなどの巻貝を回転押捺して描き出した擬縄文が存することが多い。

この系統の土器を最初に概括されたのは吉田富夫・杉塚莊介両氏であって、愛知県愛知郡鳴海町雷貝塚の土器を標式として雷式土器（註1）と命名された。

しかし各遺跡の例を対比すると、この系統の土器にも年代による様式変遷が見られる。西三河の碧海台地においては枯木宮貝塚・本刈谷塚・堀内貝塚という推移が見られることを、かつて筆者も指摘したことがあつた（註2）。それは「巻貝および縄による地文の使用が衰退」し、意匠が簡單化してゆく過程である。

では西屋敷下層土器の相対年代はいずこにおくべきであらうか。その手がかりの一つすべきは精製土器の文様である。挿図6の1（図版二の2）の並行横線間を縦の短線で区切る手法は、この地方では大洞BC式に比定せられる土器、又は大和の榎原遺跡のそれを典型とする七宝繫文風の或は環状の文様を有する精製土器と、ともなつて出現し、晩期中葉まで見られる手法である。挿図6の2（図版二の2）は波状口縁の突起部で、口縁に並行してひいた沈線が山形をなす下方に三叉状彫刻文を加える構図の、三叉が簡單に線描されたもので、安行3a式又は3b式（註3）に見られる構図に類する。これらの文様は枯木宮貝塚においても発見せられている（註4）が、西屋敷出土例

は枯木宮出土例に比べると施文が粗雑である。西屋敷貝塚の並製縁帯文土器の文様に、地文に縄文を用いたものは一例もなく、巻貝を回転したものがただ一例存し、半割竹管による連弧文や波状口縁の例が多かった見られないことなど、總じて文様が枯木宮貝塚のそれより簡單であり、むしろ本刈谷貝塚のそれに近いことも、印象としては精製土器のそれと呼応する。しかし西屋敷下層の資料の量がはなはだ少量である点を含んで、枯木宮貝塚よりあるいは新しいかも知れないが本刈谷貝塚よりも年代の降るものではない、という推論にとどめたい。

中層の縄貝層出土の土器は三群の土器のうちで最も多量に資料が得られたのであるが、下層土器の四倍の量にあたるこの中層土器中に、下層の並製縁帯文土器すなわちこの地方の地方色をなす土器の系統のものが一片も見出されなかつたことは注目せられる。そこには時間の先後だけでなく、土器型式における伝統の断絶と飛躍が見られるのである。

中層土器は精製土器と粗製の二類から成る。粗製土器にはあらい糸痕のあるものと無文のものがあるが、前者には口唇部に刻み目を加えたものがあり、後者には口唇部に指頭大の圧痕を連続して加えて小波状口縁をなすものがある。また両者ともに口縁部に複数の小突起を有するものがあるのは特徴の一とすべきである。精製土器には磨消縄文がなお愛用され、その構図には隣接地方と共通するところがあるもので、それが中層土器の相対年代を考える手がかりとなる。

挿図5の2(図版二の1)は研磨した器面に横走する三線間に千鳥に圧痕が加えられている。檀原遺跡の精製土器の一部に類似した例が

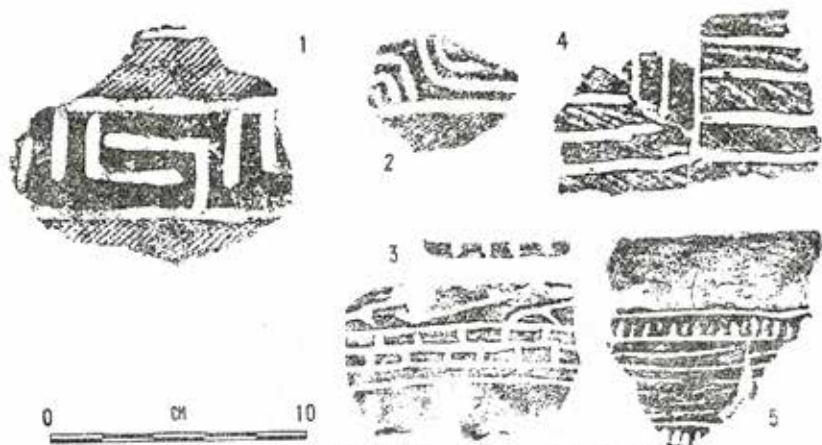
ある。

挿図5の1(図版二の1)は頸部文様帯の上段がいわゆる羊歯状文となり、下段は横走する二線間にこれを鍵の手につなく屈折線を連続して並べたものである。大洞BC式の羊歯状文とこの鍵の手文線とを上下に重ねて同一土器に用いる手法は、吉胡貝塚においてすでに出土例が存し(註5)であり、西屋敷例の上段の羊歯状文も大洞BC式のそれを模したものであろうが崩れた感じを否めない。

挿図5の4(図版二の1)も縄文をほどこした口縁部に続けてめぐらされた文様帯はやはり鍵の手文線をなしている。挿図5の3(図版二の1)は口縁部の縄文帯の下方に巾広く並行する二本の横線をひき、その中間を縦に二本ずつ並行する短線で区画し、さらにその区画内に一本の横位の短線を加えたものであるが、区画内の余地はコの字形の隆起文線に見える。それは鍵の手文線の変形とも想像せられる意匠である。

西屋敷例においては鍵の手文線は左を高く右を低く描かれているが、右を高く左を低く描かれた例もある。また挿図5の1のばあい一個の単位文線の終るところで次の単位文線が始まっているが、これを入組ませて描くと雷文にやや似た文様となる(挿図9の1)。

こうした鍵の手文線がこの地方で初めて注意されたのは渥美郡吉胡貝塚の出土例(挿図9の1、註6)であった。その欄年上の位置にはじめて説き及ばれた山内清男氏は本例について「大洞A式のものとして居なくもないが」と記され、諏訪史第一巻所載の長野県諏訪郡平野村小尾口出土の類例の項でも「大洞A又はA'のものに似て居る」(註



挿図9 各遺跡発見の帯蓋土器拓影
(1吉胡貝塚発見、2~3椛平遺跡発見、4~5大敷里貝塚発見)

7)と記されている。

その後二十年を経て昭和二十六年に文化財保護委員会が行った吉胡貝塚の発掘調査において、山内清男の担当せられた第二トレンチからこの類の文様を有する土器片が四例出土している(註8)。そのうち一例は西屋敷例挿図5の1の下段文様帯のような並列連続文様であるが、鑑の手の角が円みを帯びてSの字を引伸ばした

ようなかたちになっている。山内氏は大洞B C式に比すべき土器を含む晩旧Bに分類され「亀ヶ岡式文様の気分を持つている」と記しておられる。他の三例は入組んで雷文風の感じをあたえるもので、一(吉胡貝塚第四六図18)は晩旧Aに、一(同書第四八図25)は「大洞C旧型式に比すべき磨滑縄文ある破片」として晩旧中に、残る一(同書第四九図23)は大洞A式に相当する文様もある晩旧新のグループに含めておられる。

ひるがえつてこの地方の他の遺跡に例をもとめると、それが発見されているのは次の二遺跡である。

その一は愛知県北設楽郡東栄町椛平遺跡の出土例で、複合した鑑の手文様の例に属し、大洞B C式のそれを模した羊歯状文のある土器、ならびに東三河から遠江にかけて晩旧前半に地方色をなした口縁部に縞溝波文をめぐらした土器が伴出している(挿図9の2・3)。

その二は豊橋市大村町大敷里貝塚の出土例で、複合した鑑の手文様の変形したものとすべく、椛原遺跡の精製土器の系統の文様が簡略化されたものと伴出している(註9)。昭和二十三年の爪郷遺跡調査会による発掘調査において大洞C 2式に比すべき土器が出土しているのでそれらが晩旧中葉の後半にあたる事が知られる(挿図9の4・5)。すなわち鑑の手文様の系統の意匠が、この地方では晩旧前葉から中葉にかけておこなわれたことは確実である。しかし晩旧後葉の大洞A式に対比せられる土器に伴出した例は現在のところ吉胡貝塚のそれ以外にその例が知られていない。

西屋敷貝塚のばあい、もし下層土器を大洞B C式ないし大洞C 1式

並行の時期におくとすると、中層土器はその順序関係だけでなく、下層土器との間に型式の上で飛躍がある点からいっても年代を若干降さざるを得ないが、粗製土器の線式からいっても大洞A式並行にまで時期を降し得ないことも明らかなので、晩期中葉すなわち大洞C1式ないしC2式に並行するものである可能性が高い。

上層純貝層出土の土器は量がすくない。得た資料はすべて粗製の簡単な直口の深鉢形土器のみであった。そのほとんどがあるいは条痕を有し、純無文の土器はわずかである。条痕はすべて口唇直下から斜めに右傾して加えられていて、中層土器の条痕が口辺部においてはすべて横位に加えられているのとは差異が見られる。

この地方の縄文式晩期において、あるいは条痕を有する土器が粗製土器のほとんどを占めるに至るのは、その終末の水神平式土器の時期であるが、西屋敷貝塚の上層土器からは、資料が少ないためでもあろうが水神平式土器の指標をなすところの「大形の縄形（稀に壺形）で口縁部に凸帯を貼付し、口端およびその凸帯上に押引文をほどこし、口縁部内面には櫛歯波文またはへら描きの記号様の文様を付し、肩部の櫛歯波文帯をほさんで頭部には横位、腹部には羽状のあるいは条痕をほどこした土器」（註10）を検出できなかった。

東三河から遠江にかけての地域では、水神平式土器はその先行土器型式である五貫森式土器に伴出する段階から始まって、その模式遺跡たる愛知県宝飯郡一宮村水神平遺跡の段階において独自の型式を形成するとともに遠賀川式土器を伴存するにいたる。次いで弥生式土器への明らかな傾斜を示す水神平式B類土器の段階となるのであるが、

西屋敷貝塚上層の条痕を有する土器中には、水神平式B類土器の特徴の一つであるところの細密な櫛状器具による刷毛目を土器の内面に存するものが全く見られないので、水神平式B類の時期にまで降るものではない。しかし特製土器を一片も発見しえなかったため、尾張の五貫森式並行の土器には三河のそれより条痕が多く使用されていることも相まって、西屋敷上層土器が水神平式土器の推移のいずれの段階のものであるかは明きらかにしがたい。（久永春男）

註

- 1 吉田富夫・杉原莊介「尾張天白川沿岸石器時代遺跡の研究（2）」（考古学第十卷第十二号）、同「東海地方先史時代土器の研究」（人類学先史学講座第十三卷・一九三九）
- 2 日本考古学協会第五回總會研究発表「三河の晩期縄文式文化」昭和二十五年
- 3 山内清男「日本先史土器図譜」第十輯
- 4 拙稿「西尾市枯木宮貝塚出土の土器について」（野帳第六冊・一九五八）
- 5 故清野謙次博士資料による
- 6 渥美郡史附図・一九二三、杉山寿榮男「日本原始工藝」
- 7 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と繩紋式土器の終末」（考古学第一卷第三号・一九三〇）
- 8 文化財保護委員会「吉胡貝塚」・一九五二
- 9 伊藤博敏氏採集資料
- 10 拙稿「三河の縄文式土器」（豊橋市公民館郷土室資料目録・一九五三）

昭和三十三年三月一日印刷
昭和三十三年三月十五日刊行

(非売品)

町史資料

西屋敷貝塚

編集
行

愛知県知多郡知多町八幡
知多町役場八幡支所内
八幡公民館郷土史編纂部

名古屋市中区天王崎町五

印刷所 日大印刷株式会社

